

札幌アカシヤマンドリンクラブ ファミリーコンサート2005

本井 理

総評

かねがね感じていることであるが、この札幌アカシヤマンドリンクラブは、とても雰囲気の良い団体である。毎年欠かさずに演奏会を開催しているので「定期演奏会」と称してもよいように思われるが、名称は当初から「ファミリーコンサート」を用いており、今年も文字どおりアットホームな心温まる演奏会であった。

もちろん、その演奏を音楽（芸術）として評価しようとするとき厳しい面が多く、「心温まる演奏」であったとはいえない。ただ、最初から皆で楽しく弾くことを主眼とし、その喜びを年に一度の晴れ舞台で家族や友人に披露する発表の場なのだから、所期の目的は十分に達成されたといえるのではないだろうか。

以上の総評を読んだ方は、筆者が余りにも肯定的な評価をしているので驚かれたことと思う。実は、筆者は歌謡曲、特に懐メロが大好きで、その系統の曲目を並べられると弱いのだ。

許せないのは、このクラブの皆さんが人のよいのに付け込んで某同好団体から「亡命」し、生半可な知識で偉そうに講釈をぶったり、あげくの果てには団体を政治的に利用しようとした腹黒い連中である。その中心人物は、数年前に追放されたようだが、その後、他の同好団体に潜り込んでおり、厳重な警戒が必要である。

不愉快な話になってしまったが、以下、気になった曲目を寸評するにとどめたい。

丘を越えて（古賀政男／小林公行編曲）

オープニングで演奏したが、まことにふさわしい選曲と思う。編曲者は若い頃、故・清水保雄氏に私淑し、勤務していた郵政省では吹奏楽団の指導も行なっており、筆者が好きな音楽家の一人であるが、最近は指揮を振らなくなってしまったので寂しい。ただ、マンドリン・ギター合奏向けの懐メロの編曲作品については、この曲も含めて和声の付け方に不満があり、いつの日か、それを超える編曲をして聴いてもらえる機会がないかと考えている。

アンサンブル・コーナー（アンサンブル4組と独奏1名）

今まで見たことがなかったので、今年初めての試みかと思うが、中でも『リベル・タンゴ』（A. ピアソラ）がよかった。比較的年配のメンバーによるアンサンブルだったが、フルートの高橋満さんが上手かったし、何とんでも昔の「洒落た遊び人」の雰囲気が感じられて嬉しかった。ラストのアコーディオン独奏『ミー・プリーズ』（J. コロンボ）は「すばらしい！」の一言に尽き、この演奏を聴けるのに入場無料なのはもったいない。独奏者の児玉信之さんは、有名なアコーディオン奏者だが、こんな凄い人が毎年出演しているのは、やはり団体の雰囲気がよいからであろう。

YOSAKOI 2005（三栖妙子）

アンコールでも演奏。指揮者が最後の挨拶の折、皆で「よさこいソーラン」に出たいといていたが、本当にうらやましい限りである。しかし、メンバーの手になるこの譜面はいただけない。理由は、踊りを伴う音楽なのにリズムという概念が欠如しているからである。四国の阿波踊りでは三味線が踊りの伴奏をしているので、マンドリンも撥弦楽器である以上、同様の役割を担えるはずだ。

要するに、メロディーにこだわり過ぎている編曲者や演奏者のスタンスが問題なのだが、これは明治時代の洋楽教育導入の際に「歌」と「踊り」を分離してしまった日本人に共通する音楽的なウィーク・ポイントといってもよい（マンドリン奏者は特にそうした傾向が強い）。

同じ編曲者の手による『オペラ座の怪人』（A. ロイド＝ウェーバー）が第2部のオープニングで演奏されたが、リズムの概念が欠如していたため曲の命である冒頭部が何だか別の曲みたいで変だった。

なお、小林公行さん以外のメンバーによる民謡以外からの編曲は他に3曲あったが、著作権への配慮は大丈夫なのだろうか。この点が全般を通じてもっとも気になった点であった（2005.10.29.13:30～、於：ザ・ルーテルホール）。